

早生サトイモの調製、選別作業省力化について

松元幸男・加藤哲明

(鹿児島県農業試験場)

鹿児島県におけるサトイモの生産は、大きな伸びを示しているが、昭和52年度の総収穫量は15,100トン（全国の6%）で、本県の代表的な畑作地帯である大隅半島笠野原台地および南薩畑台地では、重要な基幹作物になりつつある。このような情勢を背景にして大隅支場では、昭和46年度から5年間、早生サトイモを基幹に数種類の露地野菜を組合せ、夫婦2人の基幹労働による実用化技術組立試験を実施した。得られた成果の中から「早生サトイモの根毛除去・選別作業の省力化とその経営効果」について報告する。

根毛除去・選別作業省力化の必要性と経営効果

笠野原台地で早生サトイモとして栽培されている「石川早生丸」は、2月下旬に植付し7月中～8月上旬に東京、名古屋、北九州方面に出荷している。

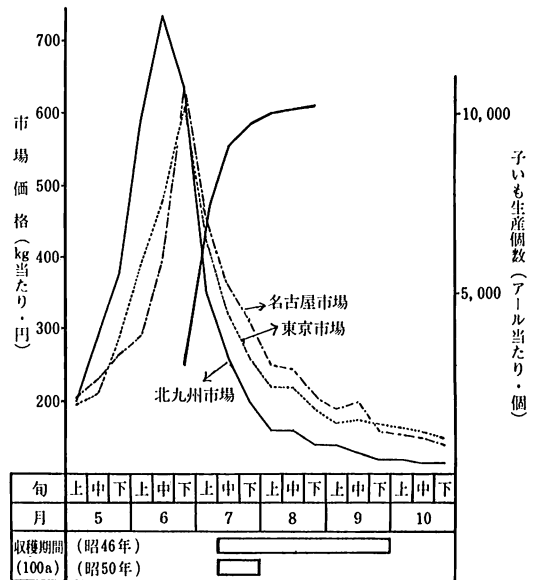
市場価格は、例年6月中～下旬の“新しいも”が最も高く、7月以降は下降線をたどるが、石川早生丸の収量を構成している子いも生産個数は6月下～7月中旬にかけて急速に伸び、その後は肥大傾向をたどっている。このことから早生サトイモの収穫適期は7月中～下旬の20日余りと思われる（第1図参照）。労働時間は、1トン当たり530時間（初年目）を要し、その内の350時間（85%）が収穫後の調製・選別作業（人力作業）に費やされている。

このように早生サトイモの栽培は、調製・選別作業に多労を要することから、高価格出荷を考えれば規模拡大の困難性や作目間の労働競合が問題となり、その省力化は早急に解決を要する課題であった。

昭和47年に、小型根毛除去機の出現を機に大隅支場において小型選別機を開発し、それを根毛除去機に連結して根毛除去と選別の同時作業を可能とした。この機械の導入により、①、根毛除去と選別作業は人力作業のわずか2%に石縮されるといふ大幅な省力化が可能となり、産地化した中での緊迫した雇用労働条件下での経営効果は大きく、また1トン当たりの労働費は、人力作業の

132,000円から3,000円に軽減した。②、機械の導入価格は、40万円程度で1トン当たりの償却費は約3,000円となり13万余円の経費節減がはかられた。③、根毛除去・選別作業の省力化により人力作業時の栽培可能面積は、3人雇用で約30アールであったものを100アールまでに伸ばす可能性を得、複合経営においては、作目間労働競合緩和がはかられる。

残された課題としては、根毛除去・選別機を導入した早生サトイモを基幹とする営農体系の検討が必要である。



第1図 サトイモの市場価格と子いも生産の推移
注) 市場価格は昭50～52年の加重平均

引用文献

- 1) 宮路龍典他：露地野菜個別專業経営の実証研究報告書，鹿児島県農業試験場（昭和51年）。
- 2) 飛松義博他：九州地域におけるサトイモの中小型機械化作業体系，農作業研究，32，（1978）。